

英語教育先進県 福井

福井県英語研究会副会長

尾形俊弘

文部科学省が実施する「英語教育実施状況調査」で、福井県の中学・高校の生徒および教員は常に全国トップレベルの結果を残しています。「福井県は他県と違う何か特別なことをしているのか」とマスコミから取材されるたびに、生徒、先生方、市町県教育委員会、大学等の努力の賜であることはもちろん、本県独自の県英語研究会の存在が大きい、と答えてきました。

県英語研究会が、子供たちの可能性を広げるため、先生方の成長を促すため、どれほど先見の明をもって活動してきたか、湯口和弘先生（元大東中学校長、元県英研放送テスト部長）のご承諾をいただき、「ふくい往来15号（2022.9.13）」で湯口先生が執筆された内容を抜粋、一部加筆により紹介させていただきます。

63年前の1959年4月1日、福井県英語研究会（略して県英研）が発足した。当時、教育研究会は数あれど、中学校と高等学校の教員がいっしょになって活動する研究会はない。（小中の連携や中高の連携がやかましく言われるようになったのはつい最近のことだ。）それはこの前年、文部省（今の文部科学省）から、高等学校、中学校それぞれ別々の研究会を持つよう指導があったからだ。福井県の英語は、中と高、2つに分ける性格のものではないという理由から文部省の指導に断固反対したという話が残っている。

この県英研こそ、福井県を「英語教育先進県」として世に知らしめたと私は確信している。福井県の英語教育を引っ張る立場にあった先生方が県英研を組織し、研究会の様々な活動を通して後輩を育て、育てられた優秀な教員が教育委員会に入って、教育委員会と県英研が一体となって県下の中高英語教育をリードしていった。今では小学校でもALT（外国語指導助手）が日本人の教員といっしょに授業を行っている。そのALTがまだ珍しかった頃、福井県教育委員会は多くのALTを採用し、県下の中学校・高校にもれなく派遣した。1987年、新設の武生東高等学校に全国に先駆ける形で英語を学ぶ国際科を設け、先進的なカリキュラムで英語教育を実施した。その成果は10年後の1997年に一般社団法人語学研究所から本県二度目となる「パーマー賞」を受賞することで結実する。（一度目は1967年に福井市明道中学校が受賞している。）「パーマー賞」はわが国における外国語教育の改善発展のために顕著な成果を収めた個人、学校、団体に贈呈される、英語教育界で最も権威ある賞である。全国津々浦々から多くの英語関係者が視察に訪れていたことを今でも鮮烈に覚えている。（中略）

振り返ってみると、福井県の英語教育は常に先進的であった。県英研が発足した直後の1960年度の高校入試で、英語科が必修だったのは本県だけであった。しかも試験問題にヒアリングテスト（今でいうリスニング問題）を課した。入試問題にヒアリングテストを出題したのは全国で2番目である。テープレコーダーはまだ普及せず、校内放送設備も完備されてい

ない学校もあったため、それぞれの高校の英語科教員が、教室を回る、又は校内放送を通じて問題を読み上げる形式であったという。ヒアリングテストが校内放送に切り替わるのは3年後のことである。

また、1961年度に2、3年生を対象に実施された文部省中学校全国一斉学力テストの英語科では、2年生が全国1位になっている。5教科でみると、2年生は全国7位、3年生は5位であった。(中略)

私が所属した県英研放送テスト部のよいところは、中高の先生が問題作成を通して情報交換できることだ。高校の先生が中学校の問題作りに参加し、中学生が何を苦手になっているかを知り、中学校の教員も高校で生徒が何を学ぶのかを知ることができる。全国で中高の連携が叫ばれる遙か以前から、福井県の英語教員は県英研の活動を通して中高連携をしてきた。県英研は設立時から筋金入りの中高連携だったのだ。

中学校には東海北陸公立中学校英語教育研究会というものがある。東海北陸7県が持ち回りで英語教育研究会を開催し、実践発表を行う。ある年、福井県でその研究会が開催され、私は何人かの他校の教員仲間(県英研仲間)とその発表の準備をすることになった。準備といっても、通常の勤務を終えてからなので、午後8時を過ぎたころから、ぼちぼちメンバーが集まり、ある程度の数になってから話し合いを始める。発表原稿を前に喧々諤々、議論が続く。12時を回り、日付もかわって2時ごろになったので「今日はもうお開きにしよう」ということになった。メンバーの1人に、通勤時間が1時間ほどかかる先生がいたので、「どうするんや」と尋ねた。すると彼は、「今から学校に戻ります。教育実習生が待っていますから。」(一同)「……」

実習生の指導教諭だった彼はのちに、県の教育委員会に入り県下の英語教員を指導する立場になった。またあれほどのハードワーカーだったのに、子供の誕生をきっかけに模範的なマイホームパパになる。彼の指導を受けていた実習生は福井県の英語教員に採用され、今では市教委指導主事になり、地域の中心的な存在として活躍している。また、いっしょに準備をしていた後輩は、教科書の編集委員になった。当時一番若かった教員は県の教育委員会で活躍した後、文部科学省に出向し、現在大学で教鞭をとっている。福井県は、そして、福井県英語研究会はこうして人を繋いできた。教員の時間外勤務が問題となっている今では到底考えられないことだが、ともに仕事をすることで人を繋ぎ、後輩を育て、全国トップレベルの教育を維持してきた。かくいう私も、放送テスト部に勧誘してくれた先輩のおかげで、6ヵ月間のイギリス海外研修に参加する機会を得る。放送テスト部に入らなければ、そんな機会を得ることは決してなかったはずだから、この先輩にはいくら感謝しても感謝し尽くせることはない。

令和4年度を振り返って

福井県英語研究会副会長

磯野和之

令和4年度はコロナ禍3年目の中、様々な取り組みが実践された1年でした。新型コロナウイルスの特性も少しずつではありますが解明され、学校現場においてはその特性に応じた対策が浸透してきています。昨年度とは異なり、陽性者の発生に対しては学校閉鎖ではなく学級閉鎖による対応等が主流となり、学校での教育活動も以前のものに近づきつつあります。しかしながら、まだまだ注意をはらうべきことがあるというのも現実です。教科的特性もあるのですが、英語科においてはペアやグループ活動、スピーチ、ディスカッション、ディベート等、対面型の授業実施の際には接触を伴う活動が多いといえるでしょう。また、本英語研究会の多くの活動や行事においても同様といえます。そのような状況の中でも、委員会活動や各種コンテスト等が以前の形に戻りつつ実施できたものが多かったことは、喜ばしい限りであり、関係先生方のご尽力の賜であると確信します。心より感謝申し上げます。

私自身もいくつかの行事に参加させていただきました。その一つに東海北陸地区のスピーチコンテストがありました。本年度は福井県開催ということでしたが、久々の対面での実施となりました。オーディエンスやジャッジを伴う会場での実施は、やはり緊張感あふれる独特の雰囲気があり、その緊張感の中だからこそ生徒たちが大きく成長していく姿には、本当に感銘を受けました。来年度は、さらに多くの活動が「普通」に開催されていくことを心から願うばかりです。

今回のコロナ禍の中で、我々は素晴らしい恩恵も受けました。県立高校においては、生徒一人ひとりにタブレット端末等が整備され、先生方も生徒も、ICT機器を駆使した授業展開が「普通」となりつつあります。是非とも、これをチャンスと捉えていただき、主体的・対話的な深い学び、そして個別最適化された学びに向けた授業構築のための一つのデバイスとして、学校チームで考察を深めていただければと思います。

また、高校においては令和4年度の1年生を皮切りに新学習指導要領が実施され、年次進行で導入されていきます。特に評価に関しては、観点別評価が導入され、具体的な評価方法について各学校では試行錯誤の中、検討および修正がなされながら実施に至っていることと思います。新しいことに取り組むというのは、なかなか骨の折れることではあります。しかし、なぜ今、観点別評価なのかという原点に立ち戻っていただき、生徒と教師両者の視点からの学習改善や授業改善へ向かうための重要な鍵であるということを改めて認識する必要があるでしょう。これも、各学校でチームとして、そして英語研究会の中でも更なる研究を進めてまいりましょう。

最後になりますが、今後とも本英語研究会活動へのご支援とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。